

第63号 「体験と経験」

前号で、人工知能の「ディープラーニング」について書きました。人工知能を作り出したのは人間であり、人間の神経細胞の仕組みを模したシステムをベースにしています。それならば、人工知能のディープラーニングを、逆に人間に適用することができるのではないかという単純な考えを、私は抱きました。もちろん、学習スピードは人工知能に勝てるはずありませんが……。

人間にとってのディープラーニングは、体験・経験することがベースになると思います。そこから得たものがデータ（経験値）として蓄積されていくはずです。様々なことに挑戦し、そのなかで成功と失敗を繰り返しながら学ぶ。無駄だと思われることに対しても一生懸命取り組む。それが人間なのではないでしょうか。

「体験」と「経験」は、英語では両方とも「experience」と表現します。しかし、ニュアンスが若干異なります。辞書によると、「体験」は個別的・主観的であるのに対し、「経験」は一般的・客観的であるとされています。また、「体験」は行動すること自体を指し、「経験」は行動した上で知識や技能を身に付けることであると記されています。英語では表現できない微妙なニュアンスを、日本語では「体験」と「経験」という言葉で表しているのです。

たとえば、学生時代に行う「職場体験」を「職場経験」という表現はしません。それに対して、「経験を積む」とは言いますが「体験を積む」とは言いません。「経験値」とは言いますが「体験値」という言葉は使いません。「経験」の方が「体験」よりも時間の積み重ねと深さを感じさせる言葉だと私は捉えています。

子どもたちには、様々なことに挑戦し多くのことを体験してもらいたい。その体験から学んだ知識や技能を経験値として蓄積し、その経験値を自分の人生に生かしてもらいたい。そのために重要なことは、新たな「気づき」と深い「考察」そして自分の人生に生かすための「工夫」だと考えます。

19～20世紀に活躍したフランスの哲学者ベルクソンの言葉を紹介します。『意識する存在にとって、生存するということは変化することであり、変化するということは経験を積むことであり、経験を積むということは限りなく己自身を創造していくことである。』

今後、人間は人工知能を頼り、依存することがますます増えていくことでしょう。人間と人工知能との共生社会はどのように築いていけば良いのでしょうか。そのために人間は何を学ぶべきでしょうか。教育はどう変化していくのでしょうか。私の「ラーニング」はまだまだ続きます。